

日本考古学小辞典

江坂 輝彌

芹沢 長介

坂詰 秀一

編

ニユー・サイエンス社

日本考古学小辞典

江坂 輝彌

芹沢 長介

坂詰 秀一

編

ニュー・サイエンス社

日本考古学小辞典

昭和58年9月30日初版発行 定価 2,500円

編	者	江	坂	輝	彌
		芹	沢	長	介
		坂	詰	秀	一
発	行	者	福	田	静
印	刷		大	村	印
			刷	株	式
			有	限	公
			司		社

発 行 所 ニュー・サイエンス 社
〒101 東京都千代田区神田錦町3丁目2-1
電 話 03 (294) 5 6 7 3

© 1983 NEW SCIENCE CO.

Printed in Japan

編 者 言

日本考古学 100 年の歴史において、われわれはすでに 4 種の辞・事典をもっている。

酒舘仲男・篠遠喜彦・平井尚志編『考古学辞典』(改造社, 1951), 水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』(創元社, 1959), 日本考古学協会編『日本考古学辞典』(東京堂, 1962), 有光教一ほか編『世界考古学事典』(平凡社, 1979) がそれである。

それぞれに特色をもつものであり、とくに後 3 者は考古学界をはじめとして関係の諸学にも広く用いられている。

これらの辞・事典は机上判としての本格的なものであり、一般読書人向きとしてはかならずしも適してはいない。

そこで、日頃『考古学ジャーナル』誌の編集に関係してきた私達は、ハンディでかつ最近の考古学界の状況を盛り込んだ小型の考古学辞典の刊行を希望してきていた。

欧米においては、Penguin Press の“A Dictionary of Archaeology” 1970 や Leonard Cottrell の“The Concicse Encyclopedia of Archaeology” 1960, J. Jelínek の“The Pictorial Encyclopedia of the Evolution of Man” 1975 (ドイツ語版あり), Andren Sherratt の“The Cambridge Encyclopedia of Archaeology” 1980,あるいは Larousse の“Dictionnaire de la Préhistoire” 1969, Jan Filip の“Enzyklopädisches Handbuch zur Ur-und Frühgeschichte Europas” I (A—K) 1966, II (L—Z) 1969, Max Ebert の“Reallexikon der Vorgeschichte” I ~ XV,

1924～32が読書界に流布し考古学の普及に役立っていることを知っているし、さらにまた専門的ではあるが Sara Chanpion の“A Dictionary of Terms and Techniques in Archaeology” 1980の有用さを見聞してきている。

そこで一般読書人を対象とした小型の考古学辞典を編集する計画をたてた。立案してより数年が経過したが、いま漸くにして公けにすることができるようになった。

本辞典の内容は、紙数の関係より簡に失し、当該項目の解説に不満をもたれる方もあるかも知れぬ。しかし、それは文末に加えた参考文献を繙いて頂くことによってその欠を補って欲しいと思う。

辞典の編集は、言うは易く行ふは難しい。私達は、全力をあげて編集に従事してきたが、それでもなお不十分な点があることは否定することができない。願わくば、多くの識者のご教示を得て補訂を加えていきたいと思う。

執筆には、現在、考古学界において活躍中の中堅研究者をはじめ新進の多くの若手に加わって頂いた。日本考古学界の現状にそくした簡潔かつ有用な解説を施して頂いたことと信じている。執筆者各位に厚くお礼を申し上げたい。

最後に長年月にわたり本辞典の編集を辛抱よく見守ってくれたニュー・サイエンス社に対して敬意を表したいと思う。

1983年8月

江 坂 輝 彌
芹 沢 長 介
坂 詰 秀 一

編 者

江 坂 輝 彌 慶応大学文学部教授

芹 沢 長 介 前東北大学文学部教授

坂 詰 秀 一 立正大学文学部教授

執 筆 者 (50 音順)

阿子島 香	車 崎 正 彦	近 森 正
穴 沢 咏 光	桑 月 鮮	中 山 清 隆
荒 幡 尚 雄	小 林 正 史	西 脇 俊 郎
池 上 悟	是 光 吉 基	丹羽 百合子
池 田 栄 史	斎 木 勝	沼山 源喜治
石附 喜三男	斎 藤 孝 正	野 口 義 麿
稲 村 繁	阪 田 正 一	野 村 幸 希
井 上 洋 一	坂 詰 秀 一	長谷山 隆博
江 坂 輝 彌	坂 本 美 夫	広 瀬 雄 一
岡 嶋 格	佐 川 正 敏	福 田 健 司
岡 本 桂 典	定 森 秀 夫	藤 村 東 男
乙 益 重 隆	佐 藤 攻	藤 原 妃 敏
小 渕 忠 秋	重 松 和 男	松 井 章
小山田 和夫	渋谷 忠 章	松 原 典 明
加 藤 定 男	杉 山 晋 作	柳 沢 和 明
梶 原 洋	須 田 英 一	山 田 晃 弘
金 子 浩 昌	関 俊 彦	山 中 一 郎
川 崎 義 雄	芹 沢 長 介	吉 田 格
木 下 宣	高 杉 博 章	渡 辺 誠

凡 例

- 1) 本辞典は日本の考古学・歴史学専攻の研究者、学生ならびに考古学に関心のある一般人を対象に、日本の考古学界の現状をふまえて、必要と思われる項目約1,500を選んで極力平易に解説したものである。
- 2) 項目の選定には主として編集委員が当たり、執筆は現在学界で活躍している考古学者から新進研究者まで総数60余名に及んでいる。項目の選定は次の大分類によった。動・植物、学説、人名、技術・技法、文化・風俗、器物・道具・馬具・武器・それらの部分名、鉱物・合金・材料、装飾・衣類・鏡、法令関係、石器、土器、遺跡、時代、層、自然、その他。
- 3) 項目の配列は五十音順とし、各項目には最も妥当と思われる読み方を示し、関連項目（見よ項目）は→印で示してある。
- 4) 記載の内容は必要最少限に止め、項目の重要度に従い長短がある。原則として現代仮名遣い、略字を使用しているが、例外として専門用語・地名で旧漢字を使用している場合もある。読み方はもっとも一般的なものを使用した。その為、例えば「横穴墓」(よこあなぼ)のように重箱読みのもものも出てきている。文末には*印(アステリック)で示した参考文献を掲げてある。文献は単行本・雑誌名は『 』, 論文名は「 」でくくってある。また執筆者名も記し、文責を明らかにしている。
- 5) 年号は原則として西暦を用い、必要に応じ日本年号を()内に示した。数字は引用を除き算用数字で示し、度量衡はkm, m, cm, mm, g, %, °, カarbonは¹⁴Cで示した。
- 6) 外国の人名、地名は片仮名の次に原名を付してある。
- 7) 挿図は必要に応じ極力入れた。
- 8) 巻末の付録は本文の理解を深めるためのものである。

日本考古学小辞典

〔 1 ～ 334 〕

日本考古学小辞典

目 次

編者言

目 次

執筆者一覧

凡 例

本 文 1～333

付 録 335～383

旧石器関係用語対照表(日・英・仏・露) 337

縄文(土器)の文様 342

部分名称一覧 346

旧石器時代編年表 356

縄文土器編年表 357

縄文土器編年表中の標式遺跡 359

弥生土器編年表 361

土師器・須恵器・灰釉編年表 363

擦文土器編年表 364

古銭一覧表 365

古墳の設計法 367

文化財保護法(抄) 368

発掘届および発見届の書式 372

日本考古学主要著書目録 374

五十音順さくいん 384～404

テーマ別さくいん 405～415

遺跡地図さくいん 416～424

協力者一覧 425

あ

会津大塚山古墳（あいづおおつかやまこふん） 福島県会津若松市一箕町にある。約90mの前方後円墳で、後円部に東西方向2基の割竹形木棺を埋置する。南棺・北棺から、日本製三角縁神獣鏡・振文鏡・玉類・剣・三葉環頭大刀・銅鏃・鉄鏃・靱・鉄斧・鉈・刀子・紡錘車形石製品・石杵と砥石などが出土し4世紀後半の前方後円墳が東北に存在することを示した。＊伊東信雄ほか「会津大塚山古墳」『会津若松史』別巻1, 1964(杉山晋作)

アイヌ アイヌとはアイヌ語で人の意。その名でよばれる人々は本来日本列島北部の原住民で、言語・生活習俗・形質など文化的・形質的に周囲他民族と異なり、かつてエゾ(蝦夷)とよばれた。近世では北海道・本州北端・千島・南樺太に居住したが、今に残る地名からカムチャッカ半島南端や東北地方北半にも及んだことが知られる。生業は狩猟漁労が主で、農耕はアワ・ヒエ等の簡単な栽培のみであった。1807(文化4)年に総数2万4000人に近いとする記録もあるが、江戸時代後半、和人の移住・接触が多くなるにつれ、もたらされた疫病や、場所請負制度による強制労働などでその数を大きく減じていった。明治以降の統計は1万6000人前後を示し、和人との同化も進んだ。和人が北海道島に居住するようになった室町時代以降、しばしば和人との大規模な抗争がくり返された。アイヌの人種帰属について、かつてコーカソイド説が多く唱えられ、他にも諸説あるが、近年モンゴロイド説が浮上している。北海道を中心に古くから居住していたと思われるが、実態はあまり明らかでない。縄文時代を通じて北海道は石狩平野までの道南部、それを越えた道東・道北部の2文化圏に明確に分かれ(前者は東北部系に属す)、そのいずれが主体をなすか究明されていないからである。ただ、統縄文時代の後半(6～7世紀ごろ)には全道的に文化圏

が統一され擦文文化に受け継がれるので、このころには単一民族としてのアイヌ民族の祖型が全道的に成立したとみなせるであろう。サケ・マスなど季節的溯上性魚に依存し、アワ・ヒエの簡単な農耕をもつ生活形態や、壁にカマドをもつ冬季住居、キテ(回転離頭銚)・マキリ(小刀)などの系譜から擦文文化は祖先文化として大きな意義をもつ。有名な熊祭りの要素をオホーツク文化に求めるべきとの指摘もある。＊アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』1969 (石附喜三男)

青石塔婆(あおいしとうば) → 板碑(いたび)

青木遺跡(あおきいせき) 鳥取県米子市青木、長者原台地に存在する遺跡の一つで、1971年から調査が実施された。その結果、縄文時代後期・晩期の落し穴、弥生時代以降の遺構として竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝墓、土壇墓、古墳、土坑など西日本では有数の遺構が検出され、特に弥生時代から奈良時代にかけての集落構造を明らかにするうえで注目される遺跡である。＊青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ, 1976～78 (是光吉基)

檜遺跡(あおきいせき) 宮崎市吉村町檜中学校校庭にある弥生時代前期の遺跡。現地は赤江灘にのぞむ阿波岐ヶ原砂丘列遺跡群中の一つである。遺物には縄文時代終末の夜白式系と、弥生初期の板付Ⅰ式の壺形と甕形土器を出土し、積石墓9基と小児壺棺・甕棺3組以上、および竪穴住居跡5軒分が検出されている。なお周辺砂丘列には広汎にわたって各時代の遺跡が分布する。＊森貞次郎「宮崎県檜遺跡」(『日本農耕文化の生成』1961)(乙益重隆)

青塚古墳(あおづかこふん) 愛知県額田郡幸田町坂崎字青塚にある。矢作川沖積地に占地する前方後円墳である。全長38m、後円部径22m、前方部幅14mほどを測ると推定されている。葺石および埴輪(円筒・家形・水鳥形)をもつ。周溝は明確にされていない。内部主体は花崗岩・片麻岩による竪穴式石室

で朱が認められ、全長4.6m、幅1.03～1.45m、高さ1.27～0.81mを測るという。副葬品は直刀・剣・鹿角製刀装具・鉄鏃・ガラス製小玉・金銅製鈴が知られる。＊大場磐雄「三河国青塚古墳と発見遺物について」(『考古学』1—3, 1930) (坂本美夫)

障泥(あおり) → 馬具(ばぐ)

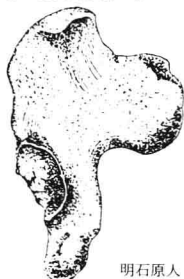
赤碓塔(あかさきとう) 石造塔婆の一種。川勝政太郎により紹介命名されたもので、鳥取県東伯郡赤碓町に存在している。宝篋印塔式の隅飾を刻出した笠をもつ宝塔形式石塔で、下部より段形をもつ基礎、下面に反花を刻出した塔身、段形と隅飾をもつ笠、相輪の4材よりなる。基礎と笠が宝篋印塔形式、塔身が宝塔の形式をとっている。宝塔の一地方色あるいは宝篋印塔の一形式とされている。＊川勝政太郎「赤碓塔」(『考古学雑誌』25—7, 1935) (斎木 勝)



赤碓塔(鳥取・赤碓町)

明石原人(あかしげんじん) 1931年4月、兵庫県明石市西郊西八木海岸で採集された人間の腰骨(左寛骨)。海岸の崖面から出土する化石骨を研究していた直良信夫によって、砂質粘土層の崖下への崩壊土の中に認められた。実物は戦災で失われたが、東京帝大に保管されていた石膏模型をもとに、1948年長谷部言人は「明石市付近西八木最新世前期堆積出土人類腰骨(石膏型)の原始性に就いて」(『人類学雑誌』60—1)の中でNipponanthropus akashimensisの通称を与え、形態に認められる原始的な特徴を指摘し、原人段階に

列するとした。同年秋、出土地点に近い場所の発掘が行われたが、化石や石器の発見はなかった。腰骨の発見に先立ち、1927年直良によって8点の石器が採集・報告されているが(『播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品』『人類学雑誌』46—5・6, 1931)、交互剝離で刃部を形成したチョッピングツール、およびチョッパーが含まれている。腰骨の再計測と多変量解析を用いた新しい研究から明石原人は現代人の範疇に含まれるという意見も出ているが、反論もあり、依然として謎の人類骨であることに変わりはない。(阿子島香)



明石原人(腰骨)

赤堀茶臼山古墳(あかほりちやうすやまこふん) 群馬県佐波郡赤堀村今井の丘陵上にある前方後円墳(全長59m)。内部主体は簡略化した木炭槨を2基埋置する。一方の槨内から石製模造品(内行花文鏡・玉・刀・剣・矛・短甲・斧・刀子など)が、他方から変形神獸鏡・鉄刀が出土した。墳丘上には葺石があり、円筒埴輪・形象埴輪(家形埴輪・器財埴輪)を検出した。調査者である後藤守一の形象埴輪の研究は埴輪研究史上重要である。＊後藤守一「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」(『帝室博物館学報』6, 1933) (中山清隆)

赤門上古墳(あかもんうえこふん) 静岡県浜北市内野西にある。三方原台地の裾部、姥ヶ谷段丘上の先端に位置する前方後円墳で、前方部を南に、南北に主軸をとる。全長56.3m、後円部径36.2m、高さ4.9m、前方部幅14.7m、高さ1.15mを測る。墳丘の外縁全体に裾石が圍繞する。葺石・埴輪はない。内

部主体は木棺直葬と考えられるものである。副葬品には三角縁神獣鏡・剣・直刀・銅鏃・鉄鏃・斧・鉈・刀子・管玉がみられる。三角縁神獣鏡はほかに同範鏡が知られる。＊下津谷達男ほか『遠江赤門上古墳』（『浜北市史資料』1, 1966）（坂本美夫）

赤湯古墳群（あかゆこふんぐん） 山形県東置賜郡赤湯町にある大群集墳で、北方山塊の山麓地帯にいくつかの支群にわかれて約500基が存在したが、現在ほとんど潰滅した。その中の二色根（にろね）2号墳は横穴式石室から直刀・鉄鏃・須恵器・和同開珎を出土し、支群の中島平古墳群から蕨手刀を出土している。＊柏倉亮吉『山形県の古墳』1953

（穴沢味光）

東原遺跡（あがりばるいせき） 沖縄本島中部の読谷村渡具知地区所在の、比謝川右岸の谷底海岸平野に立地する縄文時代草創期～前期の遺跡である。1975年から77年に3次にわたって読谷村歴史資料館によって発掘された。上層からは前期の曾畑式土器、下層からは草創期の爪形文土器が出土し、従来縄文後期を上限としていた沖縄の縄文文化を一新した。＊高宮広衛ほか『渡具知東原第1次・第2次調査報告』1977（渡辺 誠）

秋田城跡（あきたじょうあと） 秋田県秋田市高清水丘陵上に位置する。これまでの調査結果によると、外郭線は築地であり、東西・南北ともに約550mの不整多角形を呈している。城内からは掘立柱建物や堅穴住居跡が発見されており、遺物では特に「天平6年」銘の木簡が出土した。秋田城の創建は733（天平5）年の出羽柵とされ、これを裏付ける貴重な資料である。＊秋田市教育委員会『秋田城跡』1972～1982（西脇俊郎）

握斧（あくふ） → ハンドアックス

上げ底（あげぞこ） 土器の平底の底面の中央部が上部へもち上がり、底面の周囲が環状に置かれた面に接地するようつくられた底部。縄文時代早期末の尖底・円底から平底への推移過程で、尖底・円底の底面を製作過程

で指先で押し上げ、内面へ凹ませた小さな上げ底もあるが、底面まで縄文を施文したものもある。ハイガイの貝殻背の圧痕文を施文した径5cm内外の上げ底は、関東地方縄文時代前期初頭の花積下層式土器などに認められる。

（川崎義雄）

朝倉II号墳（あさくらにごうふん） 群馬県前橋市朝倉町の旧利根川段丘上に立地する2段築成の円墳（直径23m）であったが、1960年の発掘調査ののち、削平され消滅した。墳丘中央部に粘土槨を埋置する。槨内から刀・剣・鉄鏃・鎌・斧が出土し、槨外からは剣が出土した。墳丘上には墓石があり、石田川式土器が出土した。＊尾崎喜左雄『朝倉II号古墳』（『前橋市史』1, 1971）；山本良知『朝倉2号古墳』（『群馬県史』資料編3, 1981）

（中山清隆）

朝倉館跡（あさくらやかたあと） 福井市城戸ノ内町に構築された朝倉孝景から義景に至る5代の居館で、1573（天正1）年の織田信長の攻撃をうけて滅亡するまで存続した。本館は、三方を土塁と濠で囲まれた方約100mの規模を有し、諏訪館跡・湯殿跡からは庭園が発掘された。また、武家屋敷・寺院群も明らかになり、遺物も中国製陶磁器など多種多様なものが出土し、戦国大名の支配する小都市の形成や日常生活を知るうえで重視される。＊福井県教育委員会ほか『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡』I～XIV, 1969～1982

（是光吉基）

朝熊山経塚（あさまやまきょうづか） 三重県伊勢市朝熊山、金剛証寺裏山の標高540mの経ヶ峰山頂に位置する。平安末期から鎌倉時代までの43基よりなる経塚群。1959年の伊勢湾台風の風倒木を契機に1962、63年に発掘調査された。1156（保元1）年在銘陶製経筒や1186（文治2）年在銘陶製経筒などが銘6を含む金銅製・銅製・陶製の経筒40、陶製外容器3、1159（平治1）年の奥書ある法華経など紙本経12巻、瓦経4、瓦塔片2、線刻阿弥陀如来鏡像など銅鏡29、などが埋納されて

いた。＊石田茂作「伊勢朝熊山経塚」(『立正考古』18, 1961) (野村幸希)

足利公園古墳群 (あしかがこうえんこふんぐん) 栃木県足利市緑町足利公園内にある古墳群。一帯に小円墳が群在しており、緑町古墳群と称される。調査された古墳はいずれも横穴式石室を内部主体にもつ。副葬品としては玉類・金環・刀・鉄鏃・刀子・轡・杏葉・須恵器などがある。1886年の坪井正五郎による本古墳群の発掘はわが国最初の古墳の学術的調査として学史上著名である。＊坪井正五郎「足利古墳発掘報告」(『東京人類学会雑誌』30, 1888) (中山清隆)

阿島遺跡 (あじまいせき) 長野県下伊那郡喬木村にある弥生時代中期前半の集落跡で、「阿島式」の標式遺跡。天龍川の河岸段丘にあり、水田よりも畑作に適した地で、三河や遠江の文化を受け入れやすい所に位置する。大沢和夫は壺形土器に施文された太い波状文と爪形文と縄文の組み合わせが特徴と指摘した。甕・鉢・双口・瓢箪形の器種があり、東海の貝田町式や瓜郷式が共伴する。打製石斧・大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁なども出ている。＊佐藤魁信ほか「喬木村阿島遺跡」(『長野県考古学会誌』4, 1967)

(関 俊彦)

アシュール文化(Acheuléen) フランスのアミアン郊外、サン・アシュール St.Acheul 遺跡を標式遺跡とする前期旧石器時代文化。ヨーロッパではハンドアックスhand axeを伴う石器文化の新しいほうに位置付けられる。石器の稜部が直線形になり、薄く、より精緻なつくりがわかる。木や骨・角の軟質ハンマーの使用が考えられる。ミンデル氷河期からリス／ヴェルム間氷期の終わりまでの年代があてられ、30万年以上も継続したと考えられる。その分布も広く、西ヨーロッパからインドまで、およびアフリカ全土に知られる。アフリカではクリーヴァー Cleaver とよばれる幅広刃部をもつ両面調整石器を伴うことが一般的である。石器の特徴の変化が認められ、

3期に分けられる。前期では部厚い塊状のハンドアックスがあり、大型の剥片石器を伴う。中期には長さが短くなったハンドアックスがみられ、楕円形で薄いものが多い(ヒラメ形)。後期では三角形になり、尖端が鋭くつくりだされたものが多くなる。ドルドーニュ地方(フランス)ではヴェルム氷河期になって特殊な発展が知られ、ミコック文化の名でよばれている。アルジェリアのテルニフィヌ Ternifine 遺跡での原人の発見は、アシュール文化の担い手の問題を解決した。洞穴を含む多くの遺跡が調査されてはいるが、生活様式を明らかにできるには至っていない。テラアマタ Terra Amata, アンブロナ Ambrona, ラザレ Lazaretなどの遺跡は有名である。＊Jean Combier(éd.) 'L'évolution de l'acheuléen en Europe' ("Préhistoire de l'Uispp. IXe Congrès, Nice" 1976)

(山中一郎)

アジル文化(Azilien) フランス、ピレネー地方のマス・ダジル Mas-d'Azil 遺跡を標式遺跡とする晩期旧石器時代文化。1889年、ビエット E. Piette がこの遺跡で初めて旧石器時代と新石器時代の両文化層間に両者と異なる文化層を検出し、「過渡期文化」とよび、後には中石器時代文化とよばれることになった。多くの遺跡でマドレーヌ文化につづいて発見される。アレレード Alleröd 期から先ボレアル Pré-boréal 期にあてられ、1万500～9000年前の年代が与えられる。フランスからスペインにかけて分布するが、地域差が大きく、特に石器組成の量比が異なる。この地域差はすでに後期旧石器時代の終わりまでには認められていたものである。特徴的な石器は短い搔器(拇指状搔器)と半円形を呈する背付石器(アジル型小型ナイフ形石器)である。後者はシャテルペロン型ナイフ形石器を小型化したものと似ている。石器の製作技術の伝統はマドレーヌ文化から継続するので、あえてアジル文化をマドレーヌ文化第VII期と考える説もある。アジル文化は氷河時代が終わり、

気候の温暖化が始まる時期に出現し、トナカイからシカへと狩猟の対象が変わっていく。このシカの角を用いて平たい有孔鋳がつくられている。一般に骨角器は少なく、つくりも粗い。美術品にはいちじるしいものがみられなくなっているが、赤色オークで薄い礫に様式モチーフを描いた彩色礫は研究史の初期から注目された。＊Denise de Sonnevile-Bordes (éd.) 'La fin des temps glaciaires en Europe. Chronostratigraphie et écologie des cultures du Paléo-lithique final' ("Colloque Internationale du C.N.R.S." 271, 1979) (山中一郎)

網代(あじろ) 土器の底部に網代痕のあるもの。縄文時代中期ごろからみられ、後期の加曾利B式土器で最も普及し、晩期までつく。土器製作の時編布などの敷物の上でつくったため、土器の重みでその編み目が圧痕として残ったものである。材料には竹・樹皮などを加工した繊維や草本などの存在が考えられる。編み目には平編み、綾編みなどの各種がある。＊甲野勇『縄文土器の話』1976 (川崎義雄)

飛鳥板蓋宮跡(あすかいたぶきのみやあと) 642(皇極天皇1)年に造営され、645年の大化改新の舞台として有名である。その位置については、種々の説があり、1959年にその一つである奈良県高市郡明日香村大字岡で玉石敷と掘立柱建物などが発見された。その後も調査がつづけられているが、出土土器の時期などから疑問視されており、いまだ確定していない。＊奈良国立文化財研究所「平城宮・伝飛鳥板蓋宮」(『平城宮発掘調査報告』I, 1961) (西脇俊郎)

飛鳥板蓋宮伝承地遺跡(あすかいたぶきのみやでんしょうちいせき) 奈良県高市郡明日香村大字岡にある。石溝を伴う一本柱列によって圍繞される東西約160m、南北約210mの範囲に、掘立柱による大規模な宮殿遺構が発見されている。その遺構は7世紀後半から8世紀にかけて4期の変遷がある。具体的な

宮名についてはいまだ比定するにいたっていない。＊奈良県教育委員会『飛鳥京跡』I・II, 1966・67 (西脇俊郎)

飛鳥時代(あすかじだい) 一般には、美術史上の時代区分に用いる語であり、飛鳥の地に宮廬のあった時代をいう。その時代の範囲には諸説があつて、今日なお定説はない。その諸説とは、①592(崇峻天皇5)年12月8日、敏達天皇の皇后額田部皇女が飛鳥豊浦宮に即位し、推古天皇となった時から、710(和銅3)年3月10日、元明天皇が都を平城に遷すまでの110余年を指すとの説。この間、孝徳・天智・弘文の3天皇を除き、都はほぼ飛鳥の地にあつた。②仏教が公式的に伝来したといわれる6世紀中葉ごろから、上記の平城遷都に至るまでの時代を指すとの説。③6世紀中葉ごろから、孝徳天皇の御世すなわち645(大化1)年までの時代を指すとの説。④推古天皇の即位から、持統天皇が譲位し、太上天皇と号した697(持統天皇11, 文武天皇1)年8月1日までを指すとの説。⑤政治上の時代区分として行われている推古天皇時代、すなわち592(崇峻天皇5)年12月8日から73歳で崩御した628(推古天皇36)年3月7日までを指すという説、などがそれぞれである。一般には、推古天皇の御世前後を指すと理解するのが妥当であり、政治経済的には、氏姓制から律令制への過渡期に位置し、わが国固有の文化と高句麗・百済を介して伝来した中国六朝時代の文化などが混在する時代であった。飛鳥時代の中心は、6世紀中葉ごろに公式的な伝来があつたとする『日本書紀』の記述に代表される通り、仏教であつたといつてよからう。法興寺・四天王寺・法隆寺などの寺院が続々と建立され、建築・彫刻・美術・工芸などが急速に発達をみた時代である。

(小山田和夫)

飛鳥諸宮跡(あすかしよぐうあと) 7世紀初頭、推古天皇はこれまでの大和平野東南部より飛鳥の地に宮室を移し、豊浦宮に即位してより、小墾田(小治田)宮をはじめ、舒

明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、齊明天皇の飛鳥川原宮・後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮など、持統天皇の藤原宮までの間、孝徳天皇の難波宮、天智天皇の近江大津宮を除き平城宮遷都までの100年にわたる間に飛鳥の地に仮宮・行宮も含めた宮室が造営された。これら記紀所収の宮室のうち所在が調査により明確にされたのは藤原京のみであり、調査継続中の飛鳥板蓋宮伝承地は飛鳥浄御原宮の可能性も考慮されている。

＊秋山日出雄「倭京と新益京」（『日本歴史地図』原始・古代篇下、1982）（野村幸希）

飛鳥寺跡（あすかであと）古くは法興寺とよばれ、飛鳥時代に蘇我氏の氏寺として造立された。日本最古の本格的寺院で、6世紀後半に百済より渡来した造瓦技術により造立された初現の寺院である。1957年奈良国立文化財研究所の調査により、伽藍主軸線上に塔跡と中金堂跡、塔跡の東西に金堂跡が回廊に囲まれ、中金堂跡の後方に回廊を隔て講堂跡がある、いわゆる飛鳥寺式伽藍が確認された。東西の金堂は二重基壇で造立されている。塔心礎下より再埋納の舍利容器と副納品が発見され、金銅製釈迦如来像（飛鳥大仏）も創建期の造立のものである。奈良県高市郡明日香村飛鳥所在。＊奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』1958（野村幸希）

足羽山古墳群（あすわやまこふんぐん）福井市の足羽山に所在する前方後円墳1基、円墳約30基よりなる前～後期にわたる古墳群。群中の装飾図文を施した舟形石棺をもつ古墳が著名である。山頂古墳は径60mの円墳であり竪穴式石室中の石棺の身に稚拙な直弧文を巡らす。小山谷古墳は封土中に石棺を置き蓋の両側の斜面に4個ずつ8個の円文を浮き彫りにする。ともに4世紀後半の所産と想定される。＊斎藤優『足羽山の古墳』1960

（池上 悟）

阿高貝塚（あたかかいづか）熊本県下益城郡城南町阿高にある縄文時代中期の阿高式土器を出土する遺跡で、国の指定史跡。現地

は雁回山の西北麓につづく台地の北端に位置し、浜戸川の沖積平野にのぞむ。西方には幅約160mの谷を隔てて淡水産の貝を主とする御領貝塚があり、鹹水産の貝を主とする阿高貝塚との相違から、石器時代における海汀線の後退を物語る好例とされている。＊小林久雄『九州縄文土器の研究』1967（乙益重隆）

阿高式土器（あたかしきどき）九州西北部に広く分布し、熊本県下益城郡城南町阿高貝塚を標式遺跡とする縄文時代中期の土器形式である。阿高式土器は赤褐色あるいは灰褐色をした深鉢形土器が多く、口唇部に鋸歯状の凹凸を施す。文様は胴上半部より上に集約し、棒状工具による太い凹線文を主体とする入組渦巻文、点列文などを施文する。胎土には滑石の粉末を混入するものもあり、底部に鯨の脊椎骨の圧痕を有するものがある。＊前川威洋「九州における縄文中期研究の現状」（『古代文化』21-3.4、1969）（岡嶋 格）

阿玉台貝塚（あたまだいかいづか）→阿玉台貝塚（おたまだいかいづか）

安土桃山時代（あづちももやまじだい）織田信長（1534～82）と豊臣秀吉（1536～98）とがそれぞれ政権を掌握していた時代、すなわち安土時代と桃山時代との総称であり、政治史的見地からは織豊時代あるいは織豊政権の時代などとよばれることもある。1568（永禄11）年7月25日、越前より美濃立政寺に足利義昭（同年4月15日、元服し改名）を迎えた織田信長は、同年9月26日、義昭を奉じて入京し、幕府を再興するとともに新政権を樹立した。1573（元龜4、天正1）年7月19日、信長は義昭を追放して、名実ともに室町幕府を滅亡させた。このいずれかを上限とし、それ以来、1582（天正10）年6月2日の本能寺の変に至るまでの間は、信長が1576（天正4）年2月、琵琶湖東の要衝の地に安土城を築き、天下に号令し、当時の中心となっていたことに因んで、安土時代と称呼される。織田信長の遺業を受けた豊臣秀吉が天下統一に成功したのは、1590（天正18）年9月のことである

ものの、一般には、1582（天正10）年6月の本能寺の変以降、1598（慶長3）年8月18日、秀吉が死没するまでの16年間を、秀吉が晩年に過ごした伏見城のある伏見山が18世紀後半以降に「桃山」と親しみを込めて称呼されたことにちなみ、桃山時代と称している。桃山時代の下限については、上記以外に、関ヶ原の戦によって徳川の覇権が確立した1600（慶長5）年9月15日までとする説もある。豊臣秀吉は、1583（天正11）年6月2日、大坂に築城をおえ入城しており、政権の所在地からすれば、大坂時代と称すべきではあるが、文化史上における華やかな時代の表現としてもふさわしい桃山時代が、歴史全般にわたって使用されている。（小山田和夫）

吾妻鏡（あづまかがみ） 別称「東鑑」。全52巻。第45巻を欠く。1180（治承4）年の以仁王を奉じた源三位頼政の挙兵に始まり、6代將軍宗尊親王の1266（文永3）年までの86年間にわたる鎌倉幕府の政治・経済・文化の日記体による記録。編者は鎌倉御家人と推定されている。『玉葉』とともに中世史研究の根本史料。＊八代国治『吾妻鏡の研究』1913

（野村幸希）

客窯（あながま） → 窯跡（かまあと）

姉崎二子塚古墳（あねがさきふたごづかこふん） 千葉県市原市姉崎にある前方後円墳。平地に南西面して築かれ、全長105m、後円部径55m、前方部幅57mで、円筒埴輪列がある。後円部と前方部に埋葬がなされているが、施設の構造はつまびらかでない。後円部から石枕・鏡3・玉類・甲冑など、前方部から石枕・銀垂型飾付耳飾・甲・轡などが出土した。冑は鉄地金銅張の小札鋸留式衝角付冑である。

また前方部の石枕には直弧文が彫刻されている。营造時期は5世紀後葉。＊大場磐雄・亀井正道「上総国姉崎二子塚古墳調査概報」（『考古学雑誌』37-3, 1951）（車崎正彦）

アブヴィル文化（Abbevillien） 北フランス、アブヴィルのソンム川高位段丘の遺跡を標式遺跡とする前期旧石器時代文化。ヨーロ

ッパのハンドアックス hand axe をもつ石器文化の最古に位置付けられる。

まずサン・アシェール St. Acheul 遺跡で古い様相をもつハンドアックスが認められ、そうした遺物の標式としてシェル Chelles 遺跡の遺物がドウ・モルチエ G. de Mortillet によって選ばれた（シェル文化 Chelléen）。一般的にこの文化に属するとされるハンドアックスは転移磨滅を受けているが、シェル遺跡の遺物もその例にもれず、後ブリュイ H. Breuil は原位置出土の遺物が存在するとし、アブヴィル遺跡を標式とすることを提唱し、今日その用語の定着をみるに至っている。

＊Henri Breuil 'Le vrai niveau de l'industrie abbevillienne de la Porte du Bois (Abbeville)' ('L'Anthropologie', t. 49, 1939)

（山中一郎）

鏡瓦（あぶみがわら） 男瓦に接合して、軒先を装飾する円形瓦で、男瓦を接合した状態で逆位に置くと馬具の鏡に近似することよりの呼称である。軒丸瓦ともいう。6世紀後半百濟より渡来した造瓦技術により造営された奈良飛鳥寺の鏡瓦が初現である。鏡瓦の文様は蓮華文が普遍的であるが、同心円文・鬼面文・巴文・寺名などと年代の推移とともに多様になり、中世以降は家紋を入れるようになる。＊石田茂作「本邦古瓦概説」古瓦図鑑（『日本考古学入門』1951）（野村幸希）



鏡瓦 1：奈良・飛鳥寺，2：奈良・法隆寺，3：奈良・法輪寺

阿武山古墳（あぶやまこふん） 大阪府高槻市の阿武山の山頂より南にのびた尾根の頂端に位置する。地山整形を主として形成された径82mの円墳である。主体部は、地山を3mほど掘り下げた墓壇内につくられた花崗岩を用いた横口式石櫓であり、長2.6m、幅1.1m、高さ1.2mを測る。塼築の棺台上に夾紵棺が安

置され、金糸をまとい、玉枕を用いた60歳前後の男性人骨が仰臥伸展葬にて検出されている。7世紀代の築造である。＊榎原末治「摂津阿武山古墓調査報告」(『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』7, 1936) (池上 悟)

安満遺跡 (あまいせき) 大阪府高槻市八丁畷町と高垣町にかけて分布する。弥生時代から歴史時代までの集落で、1928年に調査した小林行雄は、弥生土器を「安満A・B・C類」に分け、その系譜を追求した。その結果、弥生土器は北九州のものと深いつながりがあることを主張した学史的な遺跡の一つである。1966年からの調査で方形周溝墓や大溝が見つかり、葬制にも好資料を提供した。＊小林行雄「安満B類土器考」(『考古学』3-4, 1932) (関 俊彦)

雨垂石 (あまだれいし) → 蜂巢石 (はちすいし)

網目文 (あみめもん) → 縄文の文様 (巻末参照)

アメリカ式石鏃 (アメリカしきせきぞく)

打製石鏃の一型式で、茎の基部の両側にえぐりこみ(挾入部)を入れた異形のもの。北アメリカの原住民(インディアン)の遺跡から発見される石鏃に似ているところからこの名がある。日本で発見されるものは、以前縄文時代のものと考えられていたが、その後の調査研究で主として東北地方の弥生文化に副葬品として収められているものであることが判明した。一部北陸地方にもみられる。さらに、パレスチナのナトゥーフ文化にも同様の



正面図



側面図

アメリカ式石鏃 (岩手・常盤遺跡)

形状を示す石器がある。＊Braidwood, R.J. (泉靖一ほか訳)『先史時代の人類』1969 (中山清隆)

菖蒲塚古墳 (あやめづかこふん) 新潟県西蒲原郡巻町大字竹野町字菖蒲にある。角田山塊東麓の竹野町丘陵東南端から西方に延びる一支丘の先端部に占地する前方後円墳で、全長50m、後円部径30m、前方部幅15mほどの古式な形態を呈する。内部構造は不明。文化年間刊本の『北越奇談』に盗掘によって古墳があらわれたことが記されている。享保年間のことといわれ、神獸鏡・硬玉製勾玉・碧玉製管玉などの出土が知られる。1936年には国指定史跡となった。＊上原甲子郎『菖蒲塚古墳』(巻町双書3), 1960 (坂本美夫)

綾羅木遺跡 (あやらぎいせき) 山口県下関市綾羅木町郷にある弥生時代前期の遺跡。1965年に遺跡が破壊され、国分直一らが緊急調査した。遺構は袋状堅穴群、溝、土壇群、壺棺墓が多数存在し、出土土器は遺跡名をとって「綾羅木式」と名付けられた。遺物は打・磨製石器類、鉄器、陶埴(笛)、炭化したコメ、アズキが出土。遺跡は九州・山陰・瀬戸内地域の文化が交差する所で、諸地方の要素がみられる。なお、旧石器や歴史時代の遺物も出ている。＊下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡』1981 (関 俊彦)

新久窯跡 (あらくかまあと) 埼玉県入間市新久に存在する古代窯業遺跡で、東金子窯跡群の西半分を占めている。AからEまでの5地点で瓦窯跡3基、須恵窯跡4基、それに工房跡などが検出されている。瓦窯跡から素縁六葉単弁蓮花文鏡瓦、均正唐草文字瓦をはじめ多量の文字瓦が出土し、須恵器窯跡からは甕・坏・蓋などが出土している。瓦は武蔵国分僧寺塔跡出土のものと同範であり、845(承和12)年の塔再建に伴う造瓦窯として理解されている。また、須恵器窯跡出土の資料は須恵器の編年の研究に際し、関東唯一の絶対年代比定の基準として注目されている。一方、その須恵器は集落遺跡でしばしば土師